

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

生まれて初めて、一人でバスに乗った。

家族でデパートに買い物に行くときに、いつも使う路線だ。ものごろついた頃から、月に一度は乗っていた。五年生になってからは親と一緒にいるところを友だちに見られるのが嫌だったので、バス停でも車内でも、わざと両親と離れて——一人で乗っていた。だから、だいじょうぶだ、と思っていた。だいじょうぶじゃないと困るんだ、とも自分に言い聞かせていた。もう五年生の二学期なんだから。同級生の中には、バスどころか電車にも一人で乗って進学塾に通っているヤツもたくさんいるんだから。

でも、①いままでの「一人」と今日の「一人」は違っていた。『本町一丁目』のバス停に立っているときから緊張で胸がどきどきして、おしっこをがまんしすぎたあのように、下腹が落ち着かない。

やっとバスが来た。後ろのドアから乗り込んで、前のドアから降りる。手順はすっかり覚え込んでいるはずだったのに、整理券を取り忘れそうになった。

『本町一丁目』の整理券番号は7。運転席の後ろにある運賃表で確かめると、整理券番号19の『大病院前』までは、子ども料金で百二十円だった。家族で買い物に行くときは、いつも17番の『銀天街入り口』で降りる。子ども料金は百円。四年生までは、バスに乗り込むとすぐに整理券を母に渡し、母が少年のぶんもまとめて運賃箱に小銭を入れていた。五年生になってからは、バスに乗る前に、百円玉を一つ渡されていた。「落としても、お母さん、知らないからね」といたずらっぽく笑う母の顔を思いだした。二人掛けのシートの肩の部分にある取っ手を、強く握り直した。

バスはスピードを上げたかと思うと、すぐにバス停に停まる。そのたびに少年は停留所の名前を確かめて、『大病院前』まであといくつ、と頭の中で数字を書き換える。降車ボタンを押しそびれてはいけない。整理券をなくしてはいけない。運賃箱の前でもたもたしてはいけない。財布から取り出すときにお金を落としてはいけない。いまのうちに②出しておこうか。

②百円玉一つに、十円玉

二つ——コインが一つから三つに増えただけで、握り込んだ手のひらに力をグッと込めないとお金が落ちそうな気がする。

バスは中洲のある川に架かった橋を渡って、市街地に入る。西にかたむいた太陽が街ぜんたいを薄いオレンジ色に染めている。

次は大病院前、大病院前、と車内アナウンスが聞こえた。お降りの方はお手近のボタンを押して……とつづく前に、ボタンを押した。急いで通路を前に進み、バスがまだ走っているうちに運賃箱のそばまで来た。

「停まってから歩かないと」

運転手に強い声で言われた。「転んだらケガするし、他のひとにも迷惑だろ」——まだ若い運転手は、制帽を目深にかぶって前をじっと見つめたまま、少年のほうには目も向けなかった。

数日後、父からバスの回数券をもらった。「十回分で十一回乗れるから、こっちのほうが得なんだ」——十一枚綴りが、二冊。

「だいじょうぶだよ」父はコンビニエンスストアの弁当をレンジに入れながら、少年に笑いかけた。「これを全部使うことはないから」

「ほんと？」

「ああ……まあ、たぶん、だけど」

足し算と割り算をして、カレンダーを思い浮かべた。再来週のうちに使いきる計算になる。

「ほんとに、ほんと？」

低学年の子みたいにしつこく念を押した。父は怒らず、かえって少し申し訳なさそうに「だから、たぶん、けどな」と言った。電子レンジが、チン、と音をたてた。

「よし、ごはん、ごはん。食べるぞっ」

父は最近おしゃべりになった。なにをするにもいちいち声をかけてくるし、ひとりごとや鼻歌も増えた。

お父さんも寂しいんだ、と少年は思う。

回数券の一冊目を使いきる頃には、バスにもだいお慣れてきた。

「毎日行かなくてもいいんだぞ」

父に言われた。「宿題もあるし、友だちとも全然遊んでないだろ？ 忙しいときや友だちと遊ぶ約束をしたときには、無理して行かなくてもいいんだからな」——それは病室で少年を迎える母からの伝言でもあった。

母は自分の病気より、少年のこのほうをずっと心配していた。自転車で見舞いに行きたくても、交通事故が怖いからだめだと言われた。バスで通っていても、病室をひきあげるときには必ず「降りたあと、すぐに道路を渡っちゃだめよ」と④釘を刺されるのだ。

「だいじょうぶだよ、べつに無理してないし」

少年が笑って応えると、父は少し困ったように「まだ先は長いぞ」とつづけた。「昼に先生から聞いたんだけど……お母さん、もうちょっとかかりそうだって」

「……もうちょっとって？」

「もうちょっととは、もうちょっとだよ」

「来月ぐらい？」

「それは……もうちょっと、かな」

「だから、いつ？」

⑤父は少年から目をそらし、「医者じゃないんだから、わからないよ」と言った。

二冊目の回数券が終わった。使いはじめるのとあつけない。一往復で二枚ずつ——週間足らずで終わってしまう。まだ母が退院できそうな様子はない。

「回数券はバスの中でも買えるんだろ。お金渡すから、自分で買うか？」

「……一冊でいい？」

⑥ ほんとうは聞きたくない質問だった。

父も答えづらそうに少し間をおいて、「面倒だから二冊ぐらい買つとくか」と妙に A た口調で言った。

「定期券にしないでいい？」

「なんだ、おまえ、そんなのも知ってるのか」

「そっちのほうが回数券よりも安いんでしょ？」

定期券は一カ月、三カ月、六カ月の三種類ある。父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、「定期って長いほうが得なんだよね」と言った。

「ほんと、よく知ってるんだなあ」父はまた A て笑い、「まあ、五年生なんだもんな」とうなずいた。

「……何カ月のにする？」

「お金のことはアレだけど……回数券、買つとけ」

父はそう答えたあと、「やっぱり三冊ぐらい買つとくか」と付け加えた。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそつと覗き込んだ。あのひとだ、とわかると、胸がすばまった。初めてバスに一人で乗った日に B れた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。

B 口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大学病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつかえてるだろ」と ⑦ おつきらばうに言って、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちよつと、後ろのお客さん先にするから」と少年にわきにどくよう顎を振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの?」と、さつきよりさらにぶつきらばうに聞かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

わかつている、そんなの、言われなくたって。

「⑧……お見舞い、だから」

かほそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然⑨とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えたつような色から、もっと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。⑩車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から一枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。

明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣き出しそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では⑪。病院前のバス停のベンチに座っていると、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れ始めた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら⑫。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客はだれもいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんだと気づいた。それでまた、⑬。こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出してしまった。

「どうした?」と河野さんが聞いた。「なんで泣いてるの?」——ぶつきらばうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に⑭。「財布、落としちゃったのか?」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。

河野さんは「どうした?」ともう一度聞いた。

その声にすうつと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買うと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいい

から、この回数券、ばくにください、と言った。

河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客様が待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶつきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか「回数券まだあるのか？」と父に聞かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、「ぼく、バスで帰っていい？」と聞くと、両親はきよとした顔になったが、「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？　ありがとう」と笑って許してくれた。

「帰り、ひよつとしたら、ちよつと遅くなるかもしれないけど、いい？　いいでしょ？　ね、いいでしょ？」

両手で拜んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだぞ、今夜はお寿司とるからな、パーティーだぞ」と笑った。

バス停に立って、河野さんの運転するバスが来るのを待った。バスが停まると、降り口のドアに駆け寄って、その場でジャンプしながら運転席の様子を確かめる。

何便もやり過ごして、陽が暮れてきて、やっぱりだめかなあ、とあきらめかけた頃——やっと河野さんのバスが来た。間違いない。運転席にいるのは確かに河野さんだ。

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。それでもいい。⑪通路を歩くのはバスが停まってから。整理券は丸めてはいけない。

次は本町一丁目、本町一丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆっくりと、人差し指をピンと伸ばして。

バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちよつと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。

⑫降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともし、次のバス停で待っているひともし。

だから、少年はなにも言わない。回数券に書いた「ありがとうございました」にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

バスが走り去ったあと、空を見上げた。西のほうに陽が残っていた。どこから聞こえる「ごはんできたよ」のお母さんの声に応えるように、少年は歩きだす。

何歩か進んで振り向くと、車内灯の明かりがついたバスが通りの先に小さく見えた。やがてバスは交差点をゆっくりと曲がって、消えた。

【問1】——①「いままでの『一人』と今日の『一人』は違っていた」とありますが、どういふことですか。それに関する説明としてみても適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「いままでの『一人』」とは、親の存在や友人のまなざしのことを過度に気にするあまり、みずからの考えをしつかり表明することができずにいた自分の弱さというものを示しており、「今日の『一人』」とは、親が病にたおれてしまったという事態になって、これからは、現実と向き合いながら、自分一人で強く生きていかなければならないという決意を示している。

(イ) 「いままでの『二人』」とは、家族でデパートへ買い物に行くという楽しい目的のためにバスに乗り、車中で自分一人だけの世界で満ち足りた気分を味わうことができたということを示しており、「今日の『一人』」とは、親の安否を確認するという目的のために、ひどく落ちこんだ気分の中で、自分一人のみバスに乗るはめになってしまったということを示している。

(ウ) 「いままでの『二人』」とは、バスの中で自分のことをばかにしてからかうような友だちの視線をあびながら、ひとりぼっちになってしまったということを示しているのに対して、「今日の『一人』」とは、バスの中において、だれ一人として自分のことに注意を向ける人間はなく、周囲から完全に無視されてしまっている自分に気がついたということを示している。

(エ) 「いままでの『一人』」とは、親に連れられてバスに乗っているにもかかわらず、友人に自分が幼く映ってしまうことをきらって、あたかも自分だけで乗車しているかのようなそぶりを示したものであり、「今日の『一人』」とは、やむを得ない事情があつて、同伴する者もなしにバスに乗り、すべての事態に自分一人で対処しなければならないということを示している。

【問2】

——②「百円玉二つに、十円玉二つ——コインが一つから三つに増えただけで、握り込んだ手のひらに力をグッと込めないとお金が落ちそうな気がする」とありますが、「少年」のどのような様子を示していますか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) ぬかりなく準備をしたつもりではあるが、不安な思いを消し去ることができないでいる様子。

(イ) ふだんあまり持ちなれていない額の金を手にしていることで、気持ちがあたふたしている様子。

(ウ) 百円玉をにぎりしめて家族でバスに乗って外出したところを、必死に忘れまいとしている様子。

(エ) 母親の病気が急に悪化してしまうことをおそれるあまり、体がこわばってしまっている様子。

【問3】

——③「念を押した」・——④「釘を刺される」とありますが、「念を押す」「釘を刺す」という語句の意味として適当なものをそれぞれ選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。



【問4】

——⑤「父は少年から目をそらし、『医者じゃないんだから、わからないよ』と言った」とありますが、こうした言動には「父」のどのような心情が示されていますか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 「父」は、医者からひそかに告げられた「母」の容体が実は好ましくないという事実を「少年」には伝えられないことで、心苦しさを覚えている。

(イ) 「父」は、自分にも分からない「母」の退院の時期についてしつこく問いただす「少年」をあわれに思いつつも、わずらわしさも感じ始めている。

(ウ) 「父」は、ひたすら「母」の退院を待ち望む「少年」に対して、多少なりとも安心させるような話ができないでいる状況をどこかしく思っている。

(エ) 「父」は、「母」の入院している病院にバスに乗ってしばらくは通わざるをえない「少年」の気苦労を思い、つらい気持ちさがこみ上げてきている。

【問5】

——⑥「ほんとうは聞きたくない質問だった」とありますが、どうして「聞きたくない」のですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 家計については気にしていないふりをしているが、心の中では「父」に負担をかけないようにしてはならないと思っているから。

(イ) 事実を知りたいという気持ちはあるものの、自分の期待に反するような情報が「父」から告げられてしまうことをおそれているから。

(ウ) いずれ「父」には確かめておくべきことではあるものの、「母」の病状を話し合うというこの場にはなじまない問いかけだったから。

(エ) だれにとつてもごく当たり前のことについて、疲れてしまっている「父」に聞くのが、いかにもはずかしいことのように思えたから。

【問6】

A・B にあてはまる語の言い切りの形として適当なものをそれぞれ次の中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) くやむ (イ) なげく (ウ) くだびれる

(エ) さめる (オ) しかる (カ) おどける

【問7】

——⑦「ぶつきらぼう」——⑨「とんちんかん」とありますが、次の中から語の意味として適当なものをそれぞれ選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 手段や方法がまちがっていて、よい結果が得られないこと。

(イ) 動作や物言いがあらつぽくて、相手をおどしつけること。

(ウ) 発言や行動がくいちがついていて、間がぬけていること。

(エ) 話し方や態度に親しみがなく、思いやりがないこと。

(オ) 目的やねらいが定まらず、とまどってしまうこと。

【問8】——⑧「……お見舞い、だから」とありますが、「少年」のどのような様子を示していますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい

- (ア) 「母」の入院の日数を前もって決めることはできないという思いが、そのまま口をついて出てしまった。
- (イ) 前日の「父」との間のもどかしいやりとりが思い起こされてしまって、思わず感情的になってしまった。
- (ウ) 自分の病気のために通院しているわけではないということを、どうしても伝えずにはいられなかった。
- (エ) 「母」のもとに毎日のように通っている心情について、少しでも理解してほしいという思いがあった。

【問9】——⑩「車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ」とありますが、「少年」のどのような思いが背後にありますか。その思いが具体的に示されている一文をぬき出し、初めと終わりの3字で答えなさい。なお、句読点は字数にふくめないこととします。

【問10】

C	D	E	F
---	---	---	---

に当てはまる語句の組み合わせとしてもつとも適当なものを次の中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) C 泣きじゃくった D 涙をこらえた E 涙が止まらなくなってしまった F 悲しみがつのった
- (イ) C 涙が止まらなくなってしまった D 悲しみがつのった E 泣きじゃくった F 涙をこらえた
- (ウ) C 悲しみがつのった D 涙が止まらなくなってしまった E 涙をこらえた F 泣きじゃくった
- (エ) C 涙をこらえた D 泣きじゃくった E 悲しみがつのった F 涙が止まらなくなってしまった

【問11】——⑪「通路を歩くのはバスが停まってから。整理券は丸めてはいけない」——⑫「降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、次のバス停で待っているひともいる」とありますが、この心の中の言葉は「少年」のどのような思いを示していますか。次の中からもつとも適当なものを選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) つらい気持ちをいなくなくなった車中でのできごと、今ではなつかしく思い出され、「河野さん」ともう会えないことにさみしさを感じている。
- (イ) それまでバスの中で自分がおかした数多くのあやまちについて反省しながら、この場にて「河野さん」におわびをしなくてはならないと思っている。
- (ウ) かつては自分をおこっているようにだけ感じられた「河野さん」の言葉を、今は自分に注意をうながしてくれた言葉としてしみじみ思い返している。
- (エ) この間、自分に向けて投げかけられた「河野さん」のきびしい発言には、本当は深い愛情がこめられていたという事実をしっかりとかみしめている。

【問12】

本文に関する次の説明文を読んで、(1)～(6)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「少年」がバスに乗って入院している「母」のところに通うようになって(1)

(ア) およそ一か月が経過するころ、
(イ) もう二か月近くに及んだころ、
(ウ) そろそろ三か月になったころ、

買い足した回数券の三冊目は最後の一枚になっていた。その日、「父」の都合や金を所持していなかったこともあり、「少年」は最後の回数券を使って病院から帰宅せざるを得なくなっていました。バスから降りようとする直前に、そのバスの運転手が「河野さん」であると「少年」は気づく。

(2) (エ) 「父」にも見はなされてしまったのではないかという深い悲しみ
(オ) 家を出るときに財布をつい忘れてしまったうかつさをくやむ思い
とともに、

(3) (キ) 「河野さん」に対するこれまでの否定的な印象
(ク) 「河野さん」に料金をしはらうことへの不快感
(ケ) 「河野さん」に頼らなくてはいけない情けなさ
とが入り交じって、ついに「少年」は泣き声を立ててしま

まう。ところが下車の際に「河野さん」は「少年」の話を聞き、

(4) (コ) はげましの言葉をかけてくれたのだった。
(サ) 料金までも肩代わりしてくれたのだった。
(シ) さりげなく金をわたしてくれたのだった。

「母」の退院の日、「少年」は「一人」で「河野さん」の運転するバスに乗って帰宅しようとする。五日前のできごとを

思い起こしつつ、もしあのとき、この回数券を使っていなかったら「母」の退院がもっと先のばしになっていたかもしれない、と「少年」は考えたのであろう。「少年」が最後の回数券に書き記した「ありがとうございました」という言葉には、

(5) (ス) 自分の願いをだまって受けとめてくれた「河野さん」
(セ) 母の病気がよくなるように祈ってくれた「河野さん」
(ソ) 長い間の通院の苦勞をねぎらってくれた「河野さん」
に対する感謝の気持ちがこめられているのである。

夕暮れの中、「少年」は、(6)

(タ) 「河野さん」のやさしいふるまいを思い起こしながら別れを惜しんでいる。
(チ) 「河野さん」の運転するバスを幸福感と期待感を抱きつつ見送っている。
(ツ) 「河野さん」が回数券に気づいてくれないのではないかと心配をしている。

「母」の入院という事態や「河野さん」との出会いを通じて、「少年」は自らの意思にもとづいて行動するという体験をした。「少年」は自立に向けた第一歩を踏み出したのである。

II

次の文章は、白波瀬佐和子『生き方の不平等』という本の冒頭におかれたものです。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

だが、だれに向かつて不平等を語り、その不条理（注：物事の筋道が立たないこと）を訴えるのでしょうか。何のために、何を求めて不平等を語らなくてはならないのでしょうか。そんな問いかけから、この本をはじめたいと思います。

人びとはいま、答えを求めています。いまの社会で一体、何がおこっているのか部分がしか見えてこなくて、物事を大局的にとらえることがますます難しくなっています。実際の生活も苦しくなる一方で、将来の見通しはよくありません。何よりも、われわれの子ども世代が自分たちより豊かで幸せな人生を暮らすことができるとは思えなくなってきました。そんな先行きが不安で見えにくい世の中だからこそ、人びとは明確な答えを探し、より所を求めています。しかし、はっきりした答えなどそう **A** と見つかりません。この本では、世の中のこと、社会のことについて、一つの答えを一方的に提示するのではなく、読者と共に考えてみたいと思います。

① 不平等や格差はマクロな視点です。いふならばすべての者が、不平等や格差の対象になります。不平等と聞くと、貧困といった負の部分をまず思いうかべる人が多いと思いますが、だれが貧困だけでなく、だれがお金持ちか、といったことも不平等の議論の一部です。その意味で、不平等や格差はわれわれすべてを対象としたマクロな問題であり、さまざまな現象を少し離れて見る際の一つの枠組みともいえます。

しかし、物事をマクロな視点からとらえることなど、高台から **a** ゲカイを見ることがよく、しょせん、頭でかちのたわごとにすぎないという印象をもたれるかもしれません。しかしここでマクロな視点とっているのは、傍観者（注：そのことに関わらないで、ただ見ている人）になるとか下を見下ろすといったことではなく、物事を相対的かつ大局的にとらえるという意味です。

それにしてもだれが不平等を語るべきなのでしょう。雨風をしのげる家があつて、家族が共に生活する。毎日の三度の食事に困ることもない。② そんな者に、はたして世の中の不条理を語る資格などあるのでしょうか。その日の暮らしに困ることなく、 **B**

と生活する者にとっては不平等の不条理など、結局のところ、他人ごとでしかないのではない。不平等社会・格差社会での直接的な被害者でないような者が不平等を語ること自体、不謹慎といえまいか。貧困を語るには、貧困の不条理にさらされて、自らが問題のまっただ中にいてこそ真なる声を発することができるのではない。そんな思いをいだく人がいると思います。

本当に貧しくて雨風をしのぐところもなく、その日の食べ物もままならない人たちは、書店で格差や貧困についての本を実際に手にとって、世の中の諸問題を語り合う余裕などないでしょう。彼・彼女らは日々の生活を送ることだけでも精一杯なのです。③

不平等の不条理を語るのには、ある意味、当事者でないからできるという面があります。不平等や格差の議論は、すべての者が当事者ですが、不平等の不条理にどれほどひどく、また頻繁に悩まされるのかは人によって違います。すべての事柄に人びとは当事者になりえませんが、すべてのことを体験することもできません。その一方で、貧困にある者しか貧困を語ることができないということとはなく、当事者になりえないからこそ語りえることがあります。

ものごとを認識するには、ある程度の距離が必要です。少し離れるからこそ、そこに「ものごと」があるとわかるのです。その距離こそが、ある事柄のただ中にいる当事者では見えにくい「ものごと」を見ることがつなびます。もちろん当事者でないとわからないこと、わかりえないことも沢山あります。しかし、当事者だから見えないこともあるのです。近すぎると「ものごと」は見えませんが、かといって、遠すぎても見えなくなりますし、わが身が当事者でないことをつねに自覚しないと、単なる他人ごとの傍観者になってしまうでしょう。

ただ、当事者であることと当事者でないことは、背反の関係にあるとも限りません。

C

。不平等

を語るとは、すべての者がもつこの可能性を語ることです。そのことが、不条理にある可能性を最小限におさえることができるような社会制度の仕組みを考えていくに通じます。不平等はわれわれ人間社会が生み出した問題であり、その不平等にともなう不条理をわれわれが解決していかねばなりません。

世の中は変わったとか、生き方が多様になったといわれるわりに、実際の制度もそれに付随する規範もまだ硬直的で、さまざま

まな生き方があって、さまざまな人が生きています。このさまざまな現実があり、さまざまな当事者がいることを不平等や格差の存在と関連させて、社会の中での人の生き方を考えるのが本書の狙いです。

ここで、「生き方」というと、自らが進んで積極的に選択したものといったイメージをいだく人がいるかもしれませんが。今の日本では自己責任論が叫ばれ、多様なライフスタイルが奨励されるわりに、実際に選択することのできる「生き方」はそれほど多様とはいえません。また、④「生き方」を選ぶにあたって、どれくらいの、どのような選択肢があるかは人によって異なります。進学や就職、結婚や出産に、老後など、人生には節目がいくつかあり、その節目、節目で選択を強いられます。

例えば、本当は大学に行きたいけれど、経済的に苦しいので就職することにした人がいます。当人にとって、高校を卒業して就職するという「生き方」を選んだわけですが、そこでは就職せずに大学に進学するという選択肢は現実的にはほとんどありませんでした。一方、大学に行きたいと特に思わなかったけれど、就職するにもどのような仕事につきたいのかわからないので、とりあえず、大学に行くことにしたという人もいます。これも大学進学という「生き方」の選択ですが、それを積極的に選択したというわけではありません。しかし、経済的に裕福であるので、大学に進学することが実現可能な選択肢として彼・彼女にはあったわけです。つまり、これまで生きてきた節目、節目の選択は必ずしも積極的なものばかりではなく、時に不合理的な選択もあります。選択肢の数や種類が人によって違うこと、また、特定の選択を周囲から期待される度合いが異なることなど、人生の選択には不平等がからんできます。この点を本書では、「生き方の不平等」として着目したいと思います。個人の選択の中身は多様です。人生という長い時間枠のなかでの人びとの軌跡を不平等という観点からとらえていきます。

人はそれぞれ、さまざまといっても、そのさまざまなことには⑤カイソウ性があり、不平等な状況が介在しています。個人個人のさまざまな生き方といったミクロな事象を、すべての者を対象とする不平等というマクロな枠組みから議論するのが本書の狙いです。個々人の選択には本人の意志や嗜好だけでなく、たまたまの要素が付きまといまいます。そのたまたまの要素には良いこともあれば悪い

こともあって、悪い偶然は不条理となって人びとを悩ませます。しかし、そこでの偶然なことを、たまたまだから運が悪かったね、と済ましてよいものでしょうか。貧しい家庭に生まれて高校に進学することができなかったことを、たまたまだから仕方ない、と済ますわけにはいけないと思います。

⑥個人の選択に関するたまたまの不条理を少しでも解消するには、社会という大きな単位でもってそのリスクを分散し、小さくしていくことが望まれます。では、そのために何が必要なのでしょう。それについて本書では、「お互いさまの社会」をめざすことを提案したいと思います。「お互いさま」といわれると、顔見知りの人たちの間での助け合い、といった印象が強いかもしれませんが。しかし、社会というマクロなレベルでのお互いさまの関係を制度として確立することが、これからの社会に求められています。

二〇〇〇年はじめから半ばにかけて、「下流社会」に「勝ち組・負け組」、「格差」とつく書物が書店に並び、メディアでもさかんに論じられました。格差論議がひと段落したところ、次に登場したのが「貧困」でした。働かないから貧困、働けないから貧困というだけでなく、いまや、働いていても貧困と無縁ではありません。二〇〇六年、NHKでワーキング・プア（注：働いていても生活が困難な労働者）についての番組が放映されるや、多くの視聴者をひきつけて大きな反響を呼び、ワーキング・プアへの関心が⑦イッキヨに高まりました。貧困問題のNPO活動を続ける湯浅誠氏の『反貧困』（二〇〇八年）は、貧困を重要な社会問題であると指摘し表舞台へと押し上げました。

貧困の中で最近関心が集まっているのは、子どもの貧困です。子どもの問題は一般には親との関係で取り扱われてきましたし、子どもといえればせいぜい児童福祉という枠組みで議論される程度でした。それが近年、子どもに注目が集まってきたのは、格差や貧困が社会全体といったDなどところでの議論から、貧困の具体的な事実に関心が移行して、議論そのものが成熟度を増した結果ともいえます。

こうして一〇年足らずの間に、格差や貧困といった不平等に関するテーマが飛びかい、人びとの心のうちにあった鬱憤や閉塞感（注：行きづまっている感じ）をとらえました。これまで見過ごしてきた重要な社会問題を指摘した点で、これら一連の格差・貧困論議が果たした役割は小さくありません。

その一方で、議論の対象や中身、その方向性が、**E**のように大きく揺れ動いていることも否めません。何が何でも格差だ、という時期から、格差の底辺である貧困問題へと、不平等に関する言説は短期の間にその問題の対象を変えて世の中を駆けめぐっています。人びとは一体、何を求め、何を問題として、格差を語り、貧困を語っているのでしょうか。格差や貧困についての言説そのものが、ややもすると場当たり的で、諸問題の指摘と議論の蓄積がうまく連動せずに、^④ジミチな不平等論へと発展しない危険性ははらんでいます。

日本の世論は気まぐれで移り気です。世論の関心が薄れると、政策論議もまた**F**になってしまいます。しかしながら、せっかく、格差や貧困がメディアの全面に登場し、多くの論客を取り込んで議論が始まったのですから、不平等問題を一時の流行に終わらせてはなりません。

個人をとりまく社会の問題。その問題の背景にあるのが不平等構造であり、それが格差を生み出します。不平等と格差、この二つの言葉から人びとがいただくイメージは違います。不平等というと、ニートやフリーターといったように、具体的な事例が想定され、そこにおかれた人びとの状況が不条理であることは疑うまでもありません。つまり不平等は正すべきものとされます。一方、格差は不平等よりも測定可能性が強調され、ものごとの良し悪しの価値判断に幅があります。どちらかといえば悪いことであるが、必ずしも悪いばかりともいえない。そんな価値判断の揺れが格差に認められます。

格差とは格付けされた差であるので、「違い」「差」自体に価値が介入します。何がよくて、何が悪いのか。2と1の差がどれくらい大きくて、どれくらい深刻であるかについての価値判断は、絶対的でなくて相対的であることが多いのです。もっとも違いとは

「何かと比べる」ということである以上、相対的な意味合いをつねに持ちます。

他方で、ものが食べられない、^⑤エイセイ的な場所で休むことができない、病気を治すため医者にかかることができないなど、これらのことは疑いなく許されるべきことでない、という絶対的判断を下すことができます。最近注目があつまる貧困とは、このような絶対的な「許されるべきことでない状況」としてとらえられます。ですから、貧困を語る際には、個別事例が強調され、それ自体への価値判断も大きく揺れることがあります。

格差、不平等、貧困と、許されるべきことでない状況の程度は徐々に強まっています。その意味で、格差は「違い」に対する価値判断に裁量（注：自分の考え通りに物事を決めること）の度合いが入る程度が比較的大きいといえます。^⑥どうして本書が格差でなく

不平等と銘打ったのかといえは、いまわれわれが生活するこの社会に早急に解決すべき問題があることを強調するためです。社会の中で生活し、この社会を構成している限り、われわれ一人ひとりはこの望ましくない問題に全く無関係ではありません。ですから、不平等という社会の不条理は、社会を構成するすべての者にとって他人ごとでない社会問題であり、またわれわれが立ち向かうべき対象なのだと思います。

【問1】 **a** **c** のカタカナを漢字に改めなさい（楷書でいいいに書くこと）。

a ゲカイ

b カイソウ

c イツキヨ

d ジミチ

e エイセイ

【問2】 **A** **B** に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ（ア）～（カ）の記号で答えなさい。

（ア） おどおど

（イ） ざくざく

（ウ） そわそわ

（エ） やすやす

（オ） わくわく

（カ） ぬくぬく

【問3】

——①「不平等や格差はマクロな視点です」とありますが、どういふことですか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 不平等や格差とは、この世の中に存在しているありとあらゆる物事をふくんだ、非常に範囲の広い問題である、というここと。

(イ) 不平等や格差といった問題とは、それと関係のない人は一人もいない、という立場から考えていくものである、というここと。

(ウ) 不平等や格差といった問題は、解決がきわめてむずかしいため、できるだけ多くの角度から考える必要がある、というここと。

(エ) 不平等や格差とは、本来あつてはならないのであり、一人でも多くの人が問題の解決に取り組まねばならない、というここと。

【問4】

——②「そんな者に、はたして世の中の不条理を語る資格などあるのでしょうか」とありますが、この部分の説明としてもっとも適当なものを、次の中から選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) いったん何不自由のない生活を手に入れてしまうと、かつて貧困のなかで苦しんだという経験も忘れがちになってしまふのではないか、という人間の本質にかかわる問題を、筆者は読者に対して指摘している。

(イ) 一部の人が豊かな生活を送っていることが、貧困などの社会的な問題の原因になってしまつてゐるという事実をどう解決していけばいいのか、という答えが出ない問いを、筆者は読者に対して発している。

(ウ) 恵まれた立場にいる者であつても、貧困などの問題がある社会の中でその暮らしを楽しんでいてはならないのではないかと、生活に問題を抱えていない読者に対して、筆者はその責任を自覚するよう求めている。

(エ) これといった苦勞もなく生活している者が、社会に存在する貧困などの問題に対して、自分に関わるものとして意見を表明することなどできるのだろうか、と、筆者は読者に対して、あえて問いを投げかけている。

【問5】

——③「不平等の不条理を語るのは、ある意味、当事者でないからできる」とありますが、なぜ「当事者でないからできる」のですか。その理由として適当な部分を、解答らんの指示に合う形で本文中より20字程度でぬき出しなさい。なお、句読点は字数に含むこととします。

【問6】

C にあてはまる文として、最も適当なものを次の中から選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) いまは当事者ではないけれど、社会の諸問題の当事者になる可能性をだれもがもっているからです

(イ) 社会の諸問題の当事者になったならば、自分のことで頭がいっぱいになる可能性が大きいからです

(ウ) 社会の諸問題の当事者になる可能性とは、努力をしないその本人の責任によつて高まるからです

(エ) いったん当事者となつたとしても、その社会の諸問題が解決されるという可能性もあるからです

【問7】

——④「『生き方』を選ぶにあつて、どれくらい、どのような選択肢があるかは人によつて異なります」とありますが、それはなぜですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 同じ「生き方」を選んだとしても、その決定までの過程や動機は人それぞれ異なるから。

(イ) 人にはさまざまな個性があり、それぞれの人が望む「生き方」には同じものはないから。

(ウ) その人のおかれた生活の環境や条件によつて、可能となる「生き方」はそれぞれ違うから。

(エ) 現代ではそれぞれの個人が選べる「生き方」の種類が、これまでとは異なり増えてきたから。

【問8】

⑤「個人の選択に関するたまたまの不条理を少しでも解消するには、社会という大きな単位でもってそのリスクを分散し、小さくしていくことが望めます」とありますが、これに関する次の説明文の [a] [d] にそれぞれ当てはまる語として適当なものを、後の (ア) ～ (ク) の中から選び、記号で答えなさい。

人が、経済的に豊かな家庭に生まれるか、貧しい家庭に生まれるかは、まったくの [a] によるものといえます。しかし、その結果、たとえば進学のお機に大きな違いが出てくる場合があります。進学のお機が異なれば、進学後の就職のお機も違ふことが予想できるでしょう。人生の節目において、人はそれぞれ自分の「生き方」を選ぶことになるわけですが、その選択とは、実現可能なものの中からおこなわざるをえません。人生の節目における選択とは、自分の本来の希望に即した [b] なものとなるとは限らず、その希望とは異なるものにならざるをえない場合もあります。つまり、どのような家庭に生まれたのかという一つの [a] によって、人生の進路選択に [c] という問題が積み重なっていくのです。結果として、少なくとも人が不利な立場に身を置かざるをえなくなるわけですが、それをその人個人の [d] によるものだとらえてしまうと、[c] な状況が存在し続けることになってしまいます。そうではなく、そのような状況がどのようにして作り出されたのかを明らかにし、社会全体の問題として対策を立てて解決を図っていかねければならない、と筆者は指摘しているのです。

- | | | | |
|--------|---------|---------|---------|
| (ア) 制度 | (イ) 不運 | (ウ) 不平等 | (エ) 現実的 |
| (オ) 多様 | (カ) 積極的 | (キ) 偶然 | (ク) 要素 |

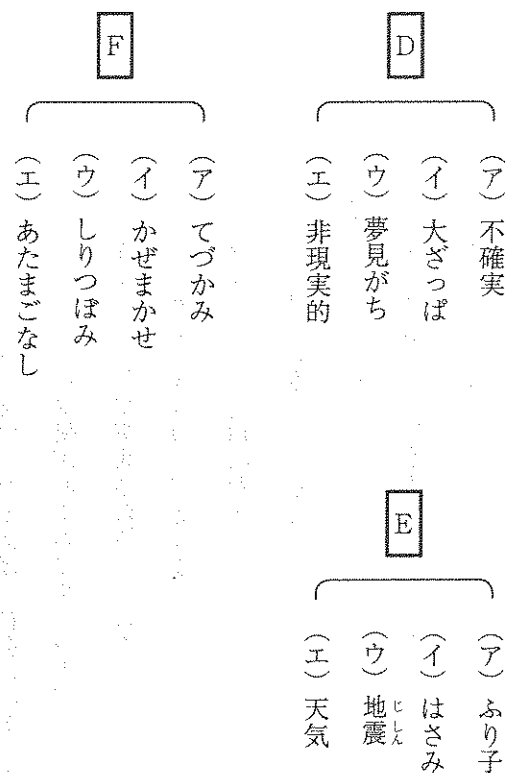
【問9】

D

E

F

に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ (ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。



【問10】

⑥「どうして本書が格差でなく不平等と銘打ったのかといえば、いまわれわれが生活するこの社会に早急に解決すべき問題があることを強調するためです」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

筆者はここで、「格差」と「不平等」という言葉のもつ意味の違いについて述べています。「格差」という言葉を使うとき、

- (ア) その「差」がどれくらいなのか、冷静に考える必要があります
- (イ) その「差」の大きさについて、常に一定であると考えがちです
- (ウ) その「差」をどのようにとらえるかは、人によって異なります

。ある程度の「格差」ならば、社会に

あつたほうがいいと考える人もいます。たとえば、社会に「差」があることにより、人々が上を目指そうとする競争心が生まれ、活力の源となる、といった主張があるのです。一方、「不平等」とは、

- (エ) 平等など、決して実現されることはない
- (オ) 平等であるべきものが、そうなっていない
- (カ) 平等について、真剣に考えなければならない

ということを表しますから、「格差」と「不平等」とは

明確に異なる意味をもつ語であるといえるでしょう。ですから、筆者が本の題名に「格差」ではなく「不平等」とかかげたことには、明確な考えがこめられているのです。「不平等」という言葉で問題をとらえた場合、

- (キ) 平等を目指していかなくてはならない
- (ク) 平等に向けて多大の苦労が予想される
- (ケ) 平等について考えをまとめる必要がある

という意味もふくむことになります。「不平等」と名指すこ

とによって、社会に存在する問題を、

- (コ) 完全になくすることはできないと認めて、できるだけよい方向に持っていく
- (サ) 他の物事と比べられないものだとして強調して、すばやい取り組みを行っていく
- (シ) 本来あつてはならないものとしてとらえ、可能な限り早い解決を求めていく

。そんな筆者の思いを、

『生き方の不平等』という題名から感じることができるとしよう。

【問11】

筆者の意見や考えとして適当なものを次の中から2つ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

- (ア) 貧困などの社会的な問題に対しては、その当事者でなくても関心をよせる必要があるが、問題の本質をきちんとわかつていいるのは、やはり当事者だといえる。

- (イ) 近年の経済の低迷は、社会全体に影響をあたえており、将来の見通しがたてにくいという不安や行きづまった感覚を、すべての世代が持つようになっていいる。

- (ウ) 格差や貧困などの問題は、この一〇年の間に世の中で大きく取り上げられたが、一時の流行に終わるおそれもあるのだ、今後もしっかりと議論していくことが大切だ。

- (エ) 社会で起こっている問題を考えていくほど、その問題と自分自身との関係を見失いがちになり、物事を上から見下ろすようになるので、気をつけなければならない。

- (オ) いま社会で起こっている問題を、格差と名付けてしまった場合、解決に向けた取り組みができなくなるおそれがあるのだ、格差という言葉は使ってはならない。

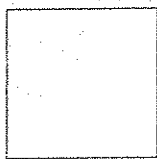
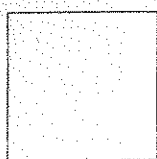
- (カ) 人生の節目における選択は、その人の未来を決定づける重要なものであるから、その時々で何が可能なのかじっくりと考えて、悔いがないようにしていくべきである。

「国語」解答用紙の訂正について

◇「国語」解答用紙

I

【問7】の解答欄について、⑧とあるのを⑨と改めるものとします。



I

問 11		
問 12	(1)	
	(2)	
	(3)	
	(4)	
	(5)	
	(6)	
問 9		
問 10		
問 6	A	
	B	
問 1		
問 2		
問 7	⑦	
	⑧	
問 3	③	
	④	
問 8		
問 4		
問 5		

問 7	
	⑦
	⑨

← ⑧を⑨に改めます



問	1

問 2

問 3	
	③
	④

問 4

問 5

問 6	
	A
	B

問 7	
	⑦
	⑧

問 8

問	9
}	

問 10

問 12	
	(1)
	(2)
	(3)
	(4)
	(5)
	(6)

問 1	
	(a)
	(b)
	(c)
	(d)
	(e)

問 2	
	A
	B

問 3

問 4

[illegible]

だから。

問	6

問 7

問 8	a
	b
	c
	d

問 9	
	D
	E
	F

問 10	
	(1)
	(2)
	(3)
	(4)

問 11

成績記入欄

受験番号		
1	2	3
1	2	3
1	2	3
2	2	3
2	2	3

氏 名